

和歌における「おのが」という語の用法

—新古今時代を中心として—

はじめに

「おのが」という語は、和歌においては『万葉集』に既に用いられており、その後も用例は少なくない。『古語大辞典』（小学館 昭五六）では「①「が」が主格の場合」わたくしが。自分が。②「が」が連体格の場合」わたくしの。自分の。」とされているが、和歌に見られる例は②の方が多い。また、『和泉式部集全釈』（注一）には『おの』は、和歌では再帰代名詞として用ゐられる。『他のだれでもない、自分自身の』とある。「おのが」の用例は、『万葉集』に一九例見られ、八代集では、『古今集』五例、『後撰集』二例、『拾遺集』五例、『後拾遺集』四例、『金葉集』（二度本、三奏本とも）一例、『詞花集』三例、『千載集』三例、『新古今集』六例となっており、時代による用例数の変化はあまりない。これは私家集においても同様である。しかし、和歌での用いられ方は新古今時代に至るまでの間に変化が見られる。また新古今時代に流行した用法があるのではないかと思われる。本稿では、新古今時代に増加したと見られる、植物に用いられた例、「おのがさつき」という表現、天象など生物以外のものに用いられた例、の三点をとりあげて考察したい。

一、植物と「おのが」

稲葉美樹

「おのが」という語は、新古今時代以前の和歌では、大半が人間か動物・鳥に用いられている（注二）。

- ① 春の野にあさる雉の妻恋に己があたりを人に知れつつ
大伴家持『万葉集』巻八 一四四六（注三）・『拾遺集』
春 二一（第四句「おのがありかを」）
- ② 恋ひつつも後も逢はむと思へこそ己が命を長く欲りすれ
『万葉集』巻一二 二八六八
- ③ 鴨すらも己が妻どちあさりして後る間に恋ふといふものを
『万葉集』巻一二 三〇九一
- ④ こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてこころな
くらむ
素性『古今集』春 一〇九・『素性集』一五（第四句「たれによそへて」）
- ⑤ ゆきつもるおのが年をばしらずしてはるをばあすとくくぞうれしき
源重之『拾遺集』冬 二六二・『重之集』三〇〇・『宗子

集』三

たがひつむことあるをとこのたやすくあはずとうらみければよめる

- ⑥ おのが身のおのがこころにかなはぬをおもはばものはおもひしりなん

和泉式部『詞花集』恋 三一〇・『和泉式部集』六七九

『万葉集』と『古今集』から『千載集』までの勅撰集で、「おのが」の次にくる語は、最も多いのが「妻」で六例、ついで「身」四例、「名」「もの」三例、「命」「世々」「羽風」二例となっている。「妻」「もの」のように、自分のものであることが明白なもの、「身」「命」「名」のように、自分自身と切り離すことができないもの、「羽風」のように、自分の動作の結果であるもの、などに分類でき、いずれも「おのが」の語が使われている対象と、「おのが」の次にくる語（①の歌でいうと、前者が「雉」、後者が「あたり」との関係が密接である。ところが、新古今時代には植物に対して「おのが」という語を用いた歌も多く見られるようになり、「おのが」の語の用法も変化していると思われる。以下、「おのが」を植物に用いた例のうち、新しい用法と思われるものを見てみたい。

- ⑦ かぜふけばおのがくもよりおのがゆきをちらしてみするやまざくらかな

藤原良経『老若五十首歌合』四四番右八八・『秋篠月清集』

九〇八

- ⑧ 谷の松おのが千とせに春やなきふるきみどりのしらぬひとしほ

『拾遺愚草員外』五六七

- ⑨ 時わかぬおのが枯葉はつもれども色ぞかはらぬ庭のくれ竹

『壬二集』一八三

- ⑩ おのが色は雪よりそこにうづもれてにほふに梅はあらはれにけり

『守覚法親王集』一三

⑦の歌では、山桜の花を雲に見立て、自分の雲から自分の雪（花びら）を散らして見せる、と詠む。この歌の場合、作者が山桜を雲に見立てたことによって初めて山桜と雲・雪とが結びついたのである、もともと山桜と雲・雪との間に何らかの関係があったわけではない。①～⑥の例ほど、「おのが」が使われている対象と、「おのが」の次にくる語との関係は密接ではない。

⑧の歌では、自分の千年もの樹齡と詠み、松の寿命が長いという特徴を強調するために「おのが」は用いられている。このような、使われている対象の特徴を強調する用法は、先に引用した『和泉式部集全釈』に記されている「他のだれでもない、自分自身の」という意の「おのが」の用法の、ヴァリエーションの一つと考えられよう。

⑨の歌では「おのが」は、枯れ葉は積もっているのに色は変わらないという対照をきわだたせ、竹の色が変わらないことを印象づけるために用いられている。

⑩の歌でも「おのが」は、雪におおわれてしまうと色はみえなくなるのに、香りは隠れることがないという対比によって、梅の香りを強調する文脈中に用いられている。

以上、⑦～⑩では、単に植物に用いられているという違いにとどまらず、前掲の①～⑥の歌ほど、「おのが」が使われている対象と、「おのが」の次の語との関係は密接ではない。何かを強調するなどの

ために、作者が意図的に用いていると考えられる。一方、新古今時代以前に「おのが」の語を植物に用いた例は、『新編国歌大観』で検索する限り、最も早い例が次の⑩の貫之の歌と思われる、その後一四例見られる。そのほかに、表現上は植物に用いられているが、内容的には人間を詠む事が主である例が、七例存する(注四)。それら新古今時代以前の用例の中で、前掲の⑦⑧⑩の歌、あるいは二章以下で扱う用法と関係すると思われるのは、次の四首である。

- ⑪ みどりなる松にかかれる藤なれどおのがころとぞ花はさきける
紀貫之『新古今集』春 一六六・『貫之集』五〇
- ⑫ 水こほる冬だにくればうき草のおのが心とねざし顔なる
『和泉式部集』七四・『万代集』冬 一四一三
- ⑬ 四の宮の御子日に、とのかはりたてまつりて
みねのまつおのがよはひのかずよりもまいくちよぞ君にひかれて
『道綱母集』三
- ⑭ 桜花おのがもろさのゆふばえに心をさへもちらしつるかな
『散木奇歌集』一三二
- ⑪の歌のように「おのが」が、「自分の」だといわんばかりに、あるいは「自分のものだと思っている」と解される歌は、二章で述べるように、新古今時代に多く見られる。貫之が既にこのような歌を詠んでいることは注目される。
- ⑫の歌は、冬になって水にとざされているのに、浮草は自分の意志で根ざしたかのような様子でいる、という内容。「おのが」が「自分の」だといわんばかりに」の意である点、⑪の歌と共通する。
- ⑬の歌の「おのがよはひ」は、松のその千年もの寿命、の意。⑧

の定家の歌の「おのが千とせ」とほぼ同義である。松の特徴を「おのが」を用いて表現した早い例として注意される。

⑭の歌では、桜の花のほかなさを「おのがもろさ」と表現し、「おのが」は桜の花の特徴をとらえた語とともに用いられている。⑬の歌とともに、植物の特徴と結びつけられて「おのが」が用いられた、⑧⑩の歌の先駆的な歌であるといえよう。このように、「おのが」が、詠まれている植物の特徴と結びつけられて用いられる例は、新古今時代には、以下のように松を詠んだ歌にまともに見られるようになる。

- ⑮ 庭の松のおのがみどりもたよりあれば今かく世の春をむかへん
『後鳥羽院御集』一六一五
- ⑯ 冬くればおのがみどりのあらはれて雪に色ある松の村だち
『拾玉集』三八一八
- ⑰ おのが色も契や春にふかみどり葉かへぬ松のかぜのまにまに
『後鳥羽院御集』一七四八
- ⑱ おのが色をやどす梢は夏の山霜よりのちを松とこそ見れ
『拾玉集』二二二八
- ⑲ おのが色のもみちぬ秋は暮れはててそめます雪を松風の音
『拾玉集』五七九二
- ⑳ みねのまつ色はさながら夏木だち風のみひとりおのが声なる
『拾玉集』二二二七
- 後鳥羽院の二首では、松の緑色を春を象徴する色として歌い、慈円の⑯⑱⑲の三首は冬になっても色の変わらない松を詠むが、いずれの歌でも「おのがみどり」「おのが色」は松自身の緑色という意に

なり、常緑樹であるという松の特徴が強調されている。また、②⑩は、松は夏には色で他の木々と区別することができないが、風だけはいかにも松風らしい音をたてているという内容で、他の五首とは対照的に、この歌では松の色は、色と同様に松の歌に多く詠まれる素材の一つである松風を引き立てる役割を果たしている。

以上の例をおおまかにまとめると、「おのが」という語は、新古今時代以前には主として人間・動物・鳥に用いられ、「おのが」が用いられている対象と、「おのが」の次にくる語との関係が密接であった。新古今時代になると、植物に使用されることも多くなるという変化にとどまらず、「おのが」を作者が何かを強調するために意図的に用いる例が多くなる。そして強調する内容は、詠まれている植物の特徴であることが多い。

二、「おのがさつき」

前章では、「おのが」という語が、歌に詠まれている植物の特徴と結びついて用いられる例を示したが、似た例は、雁を詠んだ歌には早くに見られる。以下に示す四例で、雁を常世の国から来る霊鳥とするところから、「おのがとこよ」と詠んでいる。

- a おほぞらにくものかりがねきにけらしおのがとこよはなつのやどりに
『敏行集』一九
- b うらやましおのがとこよにかへるかり我が行かたにおなじたびねを
『惟規集』二一
- c つねよりもきくそらぞなきかきつらねおのがとこよへかへるかりがね
中務『六条斎院歌合』(天喜四年閏三月) 二一

d 霧わけておのがとこよはたちしかどかすみのみよりかへるかりがね

小式部『裸子内親王家歌合 庚申』四番右八(注五)

この用法の範囲が広がり、他の動物や鳥に、その動物の特徴的な季節に用いられるようになる。

e としのうちにさきにし梅にけふよりぞおのが春とも告げよ鶯
『林葉集』一二

f 夏山のきぎのはそよぐかぜのおとをおのが秋とやしかのなくらん
『林下集』八七

g おのが秋月影さえし夜半かとてをのへの雪に鹿や鳴くらん
『拾玉集』一八〇一

h おのが秋の月を思ひてかりがねはならぶる春の花にわかるる
『拾玉集』一〇一六

e と f の歌が、比較的早い例と思われる。e では鶯と梅に「おのが春」、f と g では鹿に、h では雁に「おのが秋」と、和歌でそれぞれが多く詠まれる季節に「おのが」を用いている。そして、このような表現の中で、新古今時代に特に流行したと思われるのが、ほととぎすを詠んだ歌における「おのがさつき」である。これは、ほととぎすが五月に日本に飛来して鳴くことによる表現で、「ほととぎすの季節である五月」あるいは「ほととぎすが自分のものだと思っている五月」という意になる。この表現は、前章で示した⑪の貫之の歌に見られた、「おのが…」が「自分のものだと思っている…」という意になる用法と、「おのが」が、用いられた対象の特徴と結びつ

く用法の、両方の要素をもった表現と解せよう。「おのがさつき」の最も早い例は、次のiの俊頼の歌と思われる。

i ほととぎすおのがさ月の空ならば所もわかずしたりがほなれ

『散木奇歌集』二二二

j ほととぎすおのがさ月かものべのいはせのもりになきとよむなり

藤原隆季『久安百首』五二八

閏五月郭公

k ことしだにこゑなをしみそほととぎすおのがさ月のそへるしに

『師光集』二五

l なけやなけならのをがはのほととぎすおのが五月はこゑもをしまず

『重家集』一一四

大宰大貳重家にて、閏四月にほととぎすをまつといふことをよめる

m かぞふればなくべき程ぞほととぎすおのがさつきのなはかはれども

『隆信集』一〇〇

前中納言師仲、さ月のつごもり、人々さそひて右近馬場にまかりて、郭公まち侍りけるに

n けふここに声をばつくせほととぎすおのがさ月ものこりやはある

祐盛『新勅撰集』夏 一七七

iの歌は、『散木奇歌集 集注篇』(注六)によると、保安三年(一二二二)の作である。『新勅撰和歌集全釈一』(注七)にも指摘されているように、「おのがさつき」の最も早い用例であると思われる、『久安百首』中のjの歌よりも、約三十年先行する。

kの歌では、おまえの季節である五月が二度になった、と詠まれ

ている。源師光は生没年未詳であるが、『千五百番歌合』の判を分担しているため、建仁三年(一二〇三)頃までは生存していることになり、この時七三歳くらいとされている(注八)。彼が生きていると思われる間に閏五月があったのは、師光十歳頃の保延六年(一一四〇)と二九歳頃の平治元年(一一五九)の二度である。この歌が実際に閏五月のある年に詠まれたとすると、作者師光の年齢から考えて後者の平治元年である可能性が高いであろう。

lの歌は永暦二年(一一六一)の内裏百首での作。

mの歌では、おまえの季節である五月とは違った閏四月という名、と詠まれている。藤原隆信は、康治元年(一一四二)に生まれ、元久二年(一二〇五)に没している。また、詞書に見える藤原重家は、大治三年(一一二八)に生まれ、治承四年(一一八〇)に没している。この二人がともに生存している間で閏四月があるのは、作者隆信十歳の仁平元年(一一五二)と同二九歳の嘉応二年(一一七〇)の二度である。この歌が閏四月のある年に詠まれたとすると、隆信の年齢から考えて後者の嘉応二年である可能性が高いであろう。

nの歌が詠まれた年は未詳である。しかし、祐盛は正治二年(一二二〇)までは存命であることが知られている。また、詞書中の「師仲」は源師仲と思われ、彼は承安二年(一一七二)五月一六日に没している。詞書に「さ月のつごもり」とあるので、この歌は承安元年までに詠まれたことになる。

以上のように、平安末期の歌に散見する「おのがさつき」という表現は、新古今時代に多く見られるようになる。次に主な新古今歌人の歌を詠歌年代順に見て行きたい。

- o ほととぎすおのがさ月のくれしよりかへるくもぢにこゑうらむなり 『秋篠月清集』 六三六
- p ほととぎすいまいくよをかちぎるらむおのがさ月のありあけのころ
- q 藤原良経『正治初度百首』 四三〇・『新勅撰集』 夏 一七六・『秋篠月清集』 七二六
- r 藤原家隆『石清水若宮歌合』 郭公廿二番左一〇九
ほととぎすおのがさ月のゆふぐれをなはいでがてのみねのひとこゑ 慈円『三百六十番歌合』 夏部廿三番右一九〇
- s 雲のぼるおのが五月のむら雨に声をあらそふほととぎすかな 『後鳥羽院御集』 一五四二
- t 時しあればはなちるさとのきのあめにおのがさ月のとりのひとこゑ
- u 藤原良経『千五百番歌合』 三六二番左七二二・『秋篠月清集』 八二四
いまはとやをちかへりなく郭公おのが五月も有明の山 藤原家隆『仙洞影供歌合』 五番右一〇・『壬三集』 二二三五
- v 時鳥おのが五月を松のかぜふくかときけばむらさめのこゑ 『後鳥羽院御集』 一二三五
- w 時鳥おのが五月をつれもなく猶こゑをしむ年もありけり 『拾遺愚草』 一四一七
- x あくるより今日ひくあやめ池水におのが五月ぞなれてわかる 『拾遺愚草』 一五二四

o の歌は、西洞隠士百首の歌。この百首の成立については、①「建久七・一一・二五日の政変後、おそらく同八以降正治初年まで」(注九)、②「建久九年五月二日の『後京極殿御自歌合』の成立以後、『正治元年六月二十二日、勅勘を免ぜられ、左大臣に任ぜられるまで」(注十)などの説があるが、いずれにしても o から x の十首の中で最も早く詠まれたものである可能性が高い。p・q の歌は正治二年(一二〇〇)に詠まれた。『正治初度百首』では惟明親王も「おのがさつき」を用いている。r の歌は詠歌年代は不明であるが、建仁元年(一二〇一)三月以降の『三百六十番歌合』成立までに詠まれていたことになる。s の歌は建仁元年五月に詠まれた。t が詠まれた『千五百番歌合』では、このほかに四首(作者は藤原忠良・丹後・俊成女・藤原良平)に「おのがさつき」が用いられている。u の歌は建仁二年五月、v の歌は元久元年(一二〇四)一月に詠まれた。w の歌は貞永元年(一二三三)四月に完結した関白左大臣家百首の歌。x の歌は藤川百首の歌。藤川百首の成立については、①元久二年(一二〇五)(注十一)、②承久三年(一二二一)春頃(注十二)、③元仁元年(一二三四)(注十三)、④嘉禎三、四年(一二三三、八)(注十四)等の説がある。以上のように「おのがさつき」の用例は、正治二年から建仁二年までの三年間に少なくとも十例見られ集中している。

歌の内容をおおまかに見てみると、p の歌は、「有明」の語から五月も後半、おそらくは末近くなっていることが知られ、あと幾晩声を聞けるか心配する心を詠む。u の歌は五月が終わりに近づき、鳴きおさめをするかのように繰り返す鳴くほととぎすを、o の歌では自分の季節だと思っている五月が終わってしまった、恨めしげな声でなくほととぎすを詠む。u の歌の「いまは」はほととぎすの心情の

推察、oの歌の「こゑうらむ」は、ほととぎすの声の描写であるが、これらには作者の心情が反映されていると見られ、o・p・uのいずれからも、名残を惜しむ作者の気持ちを読み取ることも可能なのではないだろうか。sの歌では村雨の音に負けまいとするかのよう

に声をはりあげるほととぎすを詠み、wの歌では、自分の季節である五月になったのに鳴かないほととぎすを詠む。先のiからnの歌の多くが、自分の季節である五月には存分に鳴きなさいとほととぎすに言いかける内容であったのと比べると、詠みぶりが多様化していると思われる。

tの歌には「ほととぎす」は詠み込まれていないが、おそらくこの「鳥」はほととぎすであろう。逆に言えば、この頃には「ほととぎす」と詠む必要がないほど、「おのがさつき」が周知のものとなっていたことを意味しよう。xの歌では、「菖蒲」に「おのがさつき」が用いられている。定家は二首に「おのがさつき」を用いているものの、他の歌人達の間でこの表現が多用されたのが正治・建仁年間であるのと比較すると、後のことになる。ほととぎすに「おのがさつき」を用いることが既にありふれたこととなっていたため、「ほととぎす」ではなく、あえて「菖蒲」にこの表現を用いたのではあるまいか。

以上のように「おのがさつき」という表現は、新古今時代に流行する(注十五)。ほととぎすは、いうまでもなく鶯と並んでその声が非常に愛された鳥である。鳴くのを待つ心を詠んだ歌、声を聞くことができた感動を詠んだ歌は、数え切れないほど作られている。「おのがさつき」は、「ほととぎすが自分のものだと思っている五月」、「ほととぎすの季節である五月」の意であるが、この表現から、人々が待ちに待ったほととぎすの季節、という心情を感じとることもで

きよう。詠者のほととぎすへの深い愛着をこめることのできる表現として、「おのがさつき」は流行したのではないだろうか。「おのがさつき」はこの後も詠まれ、一三代集にはn・pの歌のほかに一一例見られる。

三、天象等と「おのが」

「おのが」という語が使用される範囲は、生物以外にも広がりを見せている。月や雨などのほか、風や香り、季節のような目に見えないものにまで「おのが」は用いられる。

I 月

ア おのがためあくるにもあらぬ天の戸にいそぎな入りそ秋の夜の月

俊恵『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』一八番右三六・

『林葉集』四三〇

イ てる月もおのがひかりやたむくらんしらゆふかくるすみよしのまつ

藤原伊綱『住吉社歌合』一八番左三五

ウ はやき瀬もながれざりけり月影はおのがつららをしがらみにして

源仲綱『玄玉集』天地 一四九

エ はるばるとちさとのほかへゆく月はおのがひかりやしるべなるらん

『守覚法親王集』六一

オ ちさとまでさえゆく月にこととはむあとなきゆきはおのがひかりか

守覚法親王『正治初度百首』三四七・『三百六十番歌合』

秋部一一番右三一〇

カ ながむれば心もさえぬ秋の月おのがみそらのはるのみかは

『拾玉集』九二四

キ 広沢の池の水にすむ月はおのが光をみがくなりけり

慈円『正治後度百首』一〇四六・『拾玉集』三七一九

ク おきあかす野辺のかりいほの袖の露おのがすみかと月ぞさえゆく

『拾遺愚草』二二六五・『建仁元年八月十五夜撰歌合』三三五番右七〇(第四・五句「おのがすみかに月さへぞゆく」)

ア・イ・ウの歌が、月に「おのが」を用いた比較的早い例と思われる。そして、二章までの例と同様に、新古今時代に多く詠まれるようになる。ここに示した例のほか、藤原雅経、藤原経家らが詠んでいる。それらを含め、「おのがひかり」と詠む歌が多い。「おのがひかり」と、アの歌の「おのがため」は、月と「おのが」の次の語との関係が密接であり、『万葉集』以来の伝統的な「おのが」の用法を月に用いたものである。それに対してウの「おのがつらら」は、川面に映る月の光を水に見立てたものと思われ、「月」と「つらら」とは、見立てによって初めて結びつけられたものである点、一章⑦の良経歌に通じる。カの歌では月のものである空、と詠まれていて、月を空の中心的存在ととらえており、スケールの大きさを感じさせる。また、クの「おのがすみかと」は、自分の住処であると言わんばかりに、の意で、植物や動物を詠んだ歌に見られた用法は月にも用いられている。

II 雨など

ケ おのがまだきえぬにきゆるころなればつゆこそ人をつゆとみ

るらめ

『小大君集』五三

コ しぐれのあめおのがいろかはくねなるにきぎのこのはをいかでそむらん

『教長集』四八一

サ おのがやがてそめし紅葉の散るときはおなじ声にぞ又しぐるなる

藤原俊成『五社百首』四五七

シ 朝まだき春の霞はけふたちぬくれにしとしやおのが故郷

『拾玉集』七〇二

ス もみぢばはおのが染めたる色ぞかしよそげにおける今朝の霜かな

慈円『六百番歌合』秋一九番右四五八・『拾玉集』一六七九・『新古今集』冬 六〇二

セ 物おもへばたもとをそむる露ぞおくはぎなる玉はおのが色かは

『拾玉集』四八一四

ソ おとに聞くくめのさら山さらさらにおのが名たててふるあられかな

『後鳥羽院御集』五六四

ケの歌が早い例と思われ、コの歌がそれに次ぐ。コとサの歌の「時雨」とスの歌の「霜」が、木々を紅葉させるものとして、セの歌の「露」が、袂を染めるものとして詠まれている。但しケ・サ・スの「おのが」は、主格である点は今まで本稿で扱ってきた例と異なっている。

III 風・香り

タ 桜花木のもとごとに吹きためておのが物とや風のみるらん

上西門院兵衛『久安百首』一一一六・『新統古今集』雑

一六四八

チ 秋風ぞうらやまれぬるをみなへしおこしもふせもおのがま
なり 『有房集』一三七

ツ 小倉山もみぢふきおろす松かぜはおのがときはのほどをみよ
とや 『師光集』四七

テ このごろはむめをばおのがにほひにてかよひぢしるき春のや
まかぜ 『秋篠月清集』一〇九

ト 梅が香をおのがにほひになしはてて垣ねをつたふ春の山かぜ
慈円『三百六十番歌合』春部廿六番右五二・『拾玉集』一
七一五

ナ 梅のかはおのがかきねをあくがれてまやのあまりにひまもと
むらん

『散木奇歌集』五二・『千載集』春 二六(初句「うめがか
は」・第五句「ひまもとむなり」)

ニ 梅が香はおのがたち枝にあくがれてをらぬ袖にもやどりぬる
かな 惟明親王『正治初度百首』一一一

又 霜さえて月かげしろき風のうちにおのが秋なるかねのおとか
な 『拾遺愚草員外』三八二

タ・ツの歌が風に「おのが」を用いた比較的早い例と思われる。

その中でツは、松風に対して「おのがときは」と詠まれてはいるもの、「ときは」は松との関係により導き出された語であり、特徴と結びついた用法の範疇に入れられよう。テ・トはいずれも、風が梅の香りを自分のものとしてしまったと詠み、第四句以外はほぼ同内容である。「二夜百首」中のテの歌が、「北山樵客百首」中のトの歌に先行していると思われ(注十六)、トはテの影響下に詠まれた可能性が高い。

ナ の歌は、梅の香りは、垣根をさまよい出て、真屋の軒先に入り込む隙間を探しているのであろう、と梅の香りを擬人化し、ユーモラスに生き生きと描く。ニの歌の上句は、ナ の歌の上句に酷似しており、ニはナの影響を受けているのではないかと思われる。

ヌの歌は、鐘の音に「おのが」が使われた例であるが、便宜上ここに入れた。この歌の下句は、「おのが」を連体格とすると、秋は自分の季節だといわんばかりの鐘の音であることよ、の意となり、「おのが」を主格とすると、自分自身が秋そのものである鐘の音であることよ、つまり、いかにも秋らしい響きの鐘の音である、という意となる。前者であればクの歌同様、植物や動物を詠んだ歌に見られた「おのが」の用法を鐘の音にも用いたことになる。

IV 季 節

ネ ゆく秋のおのがかたみにみよとてやまがきにきくをとどめお
くらん 『重家集』四三

ノ ただいまの野原をおのが物と見て心づよくも帰る秋かな

『拾遺愚草』一五〇

ハ 秋のいろはおのがこかげにかへりけりよものあらしをまつに
のこして 『秋篠月清集』六六五

ヒ おのが色のおよばぬ秋も染めかへつ嵐のつてに紅葉ちるたに
『拾遺愚草員外』六四三

『新編国歌大観』で検索する限り、ネの歌が、季節に「おのが」を用いた最初の例と思われ、その後定家に二例、良経に一例見られるのみである。ノの「おのが物」とは、秋自身が野原の草を枯れさせってしまったことを指すが、ハの「おのがこかげ」も同様に、秋自身

が紅葉させ、葉を散らしてしまった木陰の意であろう。この二首は、ノは秋、ハは冬という部立の違いはあるものの、「帰る秋」を詠んでいる点も共通しており、似た発想の歌である。ヒの歌の「おのが色」も同様に、秋がもたらす色、つまり紅葉の色という意であろう。ノヒでは「おのが」は、草木を紅葉させたり枯らせたりする、秋という季節の特徴に関連して用いられている。

以上、生物以外のものに「おのが」が用いられた歌を見てきた。新古今時代に詠まれた歌には、植物や動物を詠んだ歌に見られたような新しい「おのが」の用法―「自分のものだといわんばかりに」の意のもの・用いられている対象の特徴と結びついたもの―と思われる歌も存する。生物以外のものに用いた例では、より広い範囲に「おのが」を用いることと、新しい用法で詠むことの二つの試みがなされていたのではないかと思われる。

結 語

人間・動物に主として用いられてきた「おのが」という語は、植物、さらには天象など生物以外のものへと、使用される範囲を拡大して行き、植物・天象などに用いられた例は新古今時代に多くなる。また、新古今時代には①「おのが」が、用いられている対象の特徴と結びついた歌、②「おのが」が、「自分の」だと言わんばかりに、「自分のものだと思っている」という意に用いられた歌、③ほととぎすを詠んだ歌における「おのがさつき」という表現、が多く見られる。「おのが」の語の用いられ方の変化は、以上のようにまとめることができるのではないだろうか。

また、この新しい用法を早くに用いたのは、多くの場合、源俊賴

であった(一章の⑭、二章のi、三章のナ)。俊賴が中世和歌の一つの源となっていることはほぼ通説であるが、本稿の調査を通してそれを跡付けることができたと思う。その新しい用法を、多用し、発展させたのは、定家・慈円・良経・後鳥羽院らであった。「おのが」という語はどちらかといえば平凡な、小さな言葉であるが、そのような言葉を通して、新古今時代の新風の息吹を感じることができるのではないだろうか。

注

一、佐伯梅友氏・村上治氏・小松登美氏、東宝書房、昭三四、七八ページ。
二、「おのが」が一人の人間に用いられる場合、その人間の性別は、知られる限り多くが男性である。女性に用いられている例は、『万葉集』で二例、八代集では『千載集』に一例のみである。この傾向は、新古今時代に至っても変わらない。その中で和泉式部の歌においては、重出歌を除いて一四首に「おのが」の語が見られ、そのうち九例が女性に用いられている点、注意される。

三、『万葉集』は日本古典文学全集による。そのほかの和歌の引用は『新編国歌大観』による。なお、紙幅の都合上、論旨あるいは和歌の内容の理解等に不可欠と思われる場合を除き、詞書は省略した。

四、二例を示す。

やまごえ

ともにわれかへるやまぢのもみぢばのおのがちりぢりわかるべらなり
『躬恒集』六七

法華経葉草喩品の心をよみ侍りける

おほぞらの雨はわきてもそかねどうるふ草木はおのがしなじな

源信『千載集』釈教 一二〇五

「ともにわれ」の歌では、「おのが」は「もみぢば」と初句の「ともにわれ」とに対して用いられているが、自分と他の人々とは別れ別れにな

ることを言う方が主である。「おほぞらの」の歌は、仏法の恵みに差はないが、それを受ける側には違いが生じるという内容で、「草木」は衆生をさす。

五、「おのがとこよ」という表現は、その後、藤原俊成・小侍従の歌に見られる。

六、関根慶子氏、風間書房、平四、上巻一八六ページ。

七、神作光一氏・長谷川哲夫氏著、風間書房、平六、三二二ページ。

八、井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、昭六三増補版）四五

三ページ、『和歌文学辞典』（桜楓社、昭五七）、『日本古典文学大辞典』

（岩波書店、一九八四、「師光」の項は松村雄三氏担当）、『和歌大辞典』

（明治書院、昭六一、「師光」の項は寺田純子氏担当）等。

九、久保田淳氏『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九八二）七四〇

ページ。

十、青木賢豪氏『藤原良経全歌集とその研究』（笠間書院、昭五一）二六二

（三ページ）。

十一、辻彦三郎氏『藤原定家明月記の研究』（吉川弘文館、昭五二）二三四

（二二六ページ）。

十二、石田吉貞氏『藤原定家の研究』（文雅堂書店、昭三三初版、昭五七改訂三版）一〇七ページ、安井久善氏「定家・為家の藤川百首の成立年次について」（『語文』第二二輯、昭三七、一月）、『和歌文学大辞典』（明治書院、昭三七、「藤川百首」の項は渋谷虎雄氏担当）。

十三、久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』下（河出書房新社、昭六一）一二六ページ、同『藤原定家とその時代』（岩波書店、一九九四）三二一、三二二ページ、『日本古典文学大事典』（明治書院、平七、「藤川百首」の項は田中洋己氏担当）。

十四、後藤重郎氏『群書解題』。

十五、但し、勅撰集では『新勅撰集』初出。

十六、「二夜百首」は建久元年（一一九〇）二月成立、「北山樵客百首」

は、これと藤原良経の「南海漁夫百首」とを結番した『南北百首歌合』の跋に「建久五年仲秋」という年次記載があることにより、それ以前に成立したと考えられる。

A study on the usage of "onoga" in waka of "Shinkokin" age Miki Inaba

キーワード おのが おのがさつき 歌語 新古今時代 新風

（国語国文非常勤講師）